

国際漁業資源の現況

魚種	海域	資源水準	資源動向	最近5年間の漁獲量・捕獲量	管理機関・関係機関	管理目標
メバチ	中西部太平洋	低位	減少	世界：13.6～16.2万トン 日本：1.7～2.2万トン	WCPFC, SPC	検討中
	インド洋	中位	増加	世界：8.8～11.9万トン 日本：0.5～1.0万トン	IOTC	MSY：13.2万トン (9.9～20.7万トン)* SSBの増減が資源の増減
	大西洋	低位	横ばい	世界：6.3～8.8万トン 日本：1.2～1.6万トン	ICCAT	MSY：7.8～10.1万トン (中央値9.2万トン) (2013年の漁獲量：6.3万トン)
ミナミマグロ	全水域	低位	類魚資源量は増加、未成魚は増加。	世界：9,444～11,727トン 日本：2,223～2,695トン	CCSBT, ICCAT, IOTC, WCPFC	中間目標は初期産卵資源量の20%水準を2035年までに70%の確率で達成。最終的な目標は産卵資源量をB _{MSY} 水準まで回復させ、MSYによる管理を行うこと(達成期間及び確率は未決定)
	中西部太平洋	高位	安定	世界：9,367～14,363トン 日本：4,045～7,180トン	ISC, WCPFC	検討中
メカジキ	インド洋	高位	増加	世界：2.2～2.9万トン 日本：576～1,027トン	IOTC	MSY=3.9万トン
	北大西洋	中位	増加	世界：11,553～13,848トン 日本：326～1,062トン (注) 暫定値。生存放流分は含まれていない。	ICCAT	MSY
マカジキ	南大西洋	おそろしく中位	おそろしく増加	世界：7,787～12,679トン 日本：466～1,340トン* *この値は日本の近年の漁獲量を上回っているが、これは、ICCATの合意に基づき漁獲量削減の義務が課せられていない。	ICCAT	MSY
	中西部太平洋	低位	減少	世界(北大西洋)：2,410～3,961トン 日本(北大西洋)：1,715～2,408トン	WCPFC, ISC	検討中
ニシマガジキ	大西洋	低位	低位微増	世界：376～656トン* 日本：24～43トン* *漁獲量には、いずれもラグーン・ステッド・ホルツァー・フィッシュの漁獲量が入っていると推定される。	ICCAT	MSY
	太平洋	中位	安定	世界：17,400～19,400トン 日本：3,200～4,000トン	WCPFC, ISC, IATTC	検討中
クロカジキ	大西洋	低位	減少	世界：1,389～3,497トン 日本：182～822トン	ICCAT	MSY
	東部太平洋	高位	横ばい	世界：150～28.0万トン 日本：60～81トン	IATTC	MSY
カツオ	中西部太平洋	高位	減少	世界：154.3～181.0万トン 日本：24.3～29.9万トン	WCPFC, SPC	検討中
	インド洋	高位	横ばい	世界：31～44万トン 日本：900～3,500トン	IOTC	MSY：68.4万トン (55.0～84.9万トン)
ウハハサメ	大西洋	高位	横ばい	世界：17.1～25.8万トン 日本：1～5トン	ICCAT	MSY
	日本周辺	調査中	調査中	世界：調査中 日本：年に0～2船体程度が定置網に進入	FAO, CITES	なし
ホホジロザメ	日本周辺	調査中	調査中	世界：年間1～5船体の網が報告されている	FAO, CITES	なし

(総括表) - 2 -

資源の状態	管理措置	最新の資源評価	次の資源評価
MSY=10.8万トン F ₂₀₀₀ /F _{MSY} =1.57* SB ₂₀₀₀ /B _{MSY} =0.94* SB ₂₀₀₀ /SB _{2000,MSY} =0.20* C ₂₀₀₀ /MSY=1.45* *レバレンススケースの値	(a) まき網漁業(熱帯水域) ・集魚装置の使用の段階的な規制強化(2014～2016年) ・公海における集魚装置使用の原則禁止(2017年) ・島嶼国以外のメバチが保有する隻数の規制 (b) はえ網漁業 メバチの漁獲量を2001～2004年の平均値から40%削減(2014年から段階的に実施) 現在(2012年)の漁獲努力量レベルは管理措置は特に必要でない。台湾への漁獲量割当35万トン、熱帯まぐろ(メバチ、キハダ)を漁獲対象とする漁獲量の2006年水準への制限、まき網・はえ網漁業のログブック制度の義務化及びオプショナル・ログブック制度の義務化(2013年3月) ・データ提出義務(2010年2月)	2014年 2014年	未定 2016年
SSB ₂₀₀₀ /SSB _{MSY} : 1.44 (0.87～2.22)* F ₂₀₀₀ /F _{MSY} : 0.42 (0.21～0.80)* 漁獲量はMSYレベルの前期(資源量はほぼMSYレベル)を超過していない。	TAC (8.5万トン)、主要国の漁獲枠、漁船隻数等の設定 ギニア湾(アフリカ大陸～南緯10度、西経5度～東経5度)、1月1日～2月28日の浮き魚礁を利用するまき網の禁漁 統計証明制度 オプショナル・乗船(まき網、草釣り)	2010年	2015年
F/F _{MSY} : 0.65～1.55 (中央値0.95) B/B _{MSY} : 0.72～1.34 (中央値1.01)	TACの設定：2015～2017年漁期のTACは毎年14,647トン(日本4,737トン) 漁獲証明制度	2014年	2017年
現在の資源量は乱獲状態に近く、漁獲も過剰な水準ではない。 F/F _{MSY} =0.34 及び SSB/SB _{MSY} =3.10 漁獲枠・産卵資源量共にMSYからかなり離れたレベルにあり資源は安全な状況にある。南西インド洋では地域的に資源量はMSYレベル以下(軽度の乱獲状況)となっている。	なし ・インド洋全域では現在の漁獲量・漁獲努力量水準は持続可能な資源管理の必要なし。 ・南西インド洋では地域的に軽度の過剰漁獲であるので、今後2009年の資源量は2009年レベル(6,678トン)以下にする。 ・オプショナル・乗船(2011年4月) ・ログブックの義務化(2013年3月) ・データ提出義務(2010年2月)	2014年	2017年
13,660 (13,250～14,080) トン B ₂₀₀₀ /B _{MSY} : 1.114 (1.05～1.24) F ₂₀₀₀ /F _{MSY} : 0.82 (0.73～0.91)	・2014～2016年各年のTACを13,700トン(日本の割り当ては82トン)とする。開閉期割り当てについて、割り当てを超過もしくは余った場合には、2年以内で釣りは差し引く。上乗せを行い調整することができ、ただし、調整分は割り当て量の5%を超えてはならない。 ・500トン以上の開閉期または600kg未満の開閉期を越えない開閉期とする。 ・開閉期長125cm/体重25kg未満の開閉期の体積を15%以下に抑えるか、下顎長119cm/体重15kg未満の開閉期の体積を0%にする(後述の計画含む)。	2013年	2016年
おそろしくB ₂₀₀₀ /B _{MSY} >1 おそろしくF ₂₀₀₀ /F _{MSY} <1	各国が漁獲量を、2000～2003年の最高漁獲量から2011年は10%、2012年は15%、2013年は20%削減。 2013～2015年のTACを400トンとする(日本の割当量は各年とも35トン)。はえ網、まき網における漁獲量は、1996年から1999年の水揚げ量の多い方の35%以下に抑える。	2011年 2012年	2015年
現在の資源状態は乱獲状態にあり、かつ漁獲は過剰な水準にある。	検討中 1996年のはえ網及びまき網漁業の漁獲量に対する最近年の漁獲量：0.52	2013年	未定
おそろしくB ₂₀₀₀ /B _{MSY} >1 おそろしくF ₂₀₀₀ /F _{MSY} <1	F ₂₀₀₀ 年/F _{MSY} (age 2+) = 0.8 SSB ₂₀₀₀ 年/SSB _{MSY} =1.2 SSB ₂₀₀₀ =19,436トン MSY=19,459トン 2013～2015年のTACを2000トンとする(日本の割当量は300トン)。	2012年	未定
まき網兼用網 CPUE と FADCPUE から過剰に利用されていないと考えられる。	特定措置なし(メバチ・キハダの保存管理措置として、まき網漁業に対し62日間の全面禁漁及び併合特定区での1か月の禁漁が導入されており、結果として本種に対する漁獲努力量は制限されている)。	2005年 2014年に指 標のみ更新	未定
SB ₂₀₀₀ /SB _{MSY} : 1.94 F ₂₀₀₀ /F _{MSY} : 0.62 (current: 2008～2011年の平均)	・集魚装置の使用の段階的な規制強化(2014～2016年) ・島嶼国以外のメバチが保有する隻数の規制	2014年	2017年
漁獲努力量も資源量もMSYレベル以下で過剰な漁獲や乱獲状態には至っていない。	資源量の不確実性、FADs 操業による低漁獲率及び増大している努力量 を考えると、漁獲量はMSY割当の下限(55万トン)を上回るべきではない。 2003年IOTC年次会議で「全長24 m以上の漁網の総重量等の制限」が採 択された(その他の漁獲・漁網管理対策はインド洋メバチ詳細参照)。	2014年	2017年
悪化の兆候は認められない	・漁船登録 ・FADs 操業の禁漁区・禁漁期	2014年	未定
検討中	—	—	—
検討中	—	—	—

